

**令和元年度第2回 京丹波町地域包括ケア推進委員会及び
第1回京丹波町地域包括支援センター運営協議会
並びに第1回京丹波町地域密着型サービス運営委員会**

日時：令和元年11月25日（月）13時30分～15時35分
場所：瑞穂保健福祉センター2階 集団指導室・健康学習室

出席者：片山委員長、津田副委員長、
荒牧委員、岡本委員、寺谷委員、谷口委員、奥井委員、大田委員、村上委員、藤田委員、
大西委員、瀧村委員、岡田委員、谷山委員、越川委員（15人）

欠席者：野間委員、堀委員、桐野委員、塩貝委員（4人）

事務局：保健福祉課：井上補佐、島田主任、西村係長、中川主査、岡本補佐
医療政策課：欠席

（福）京丹波町社会福祉協議会 地域福祉課：岬課長（京丹波町生活支援コーディネーター）

（保健福祉課 大西課長、医療政策課 中川課長欠席）

（株）ぎょうせい：成田

1 開会

2. 委員長あいさつ

11月も終わりに近づき、年末の忙しい時期となった。皆さんには、本事業についてお世話になりお礼を申し上げる。本日は3つの会議を開催させていただく。皆さんのご意見をいただきながら、より一層、本町の福祉が着実に進み、住んでおられる方が安心できると感じていただける計画と実践にしていきたいと思います。

3 協議事項

（1）第2回 京丹波町地域包括ケア推進委員会

①京丹波町介護保険事業の動向について

（説明：事務局 資料1説明）

委員：調整済み認定率が低い理由は何か。

事務局⇒働く元気な高齢者が多いことと、総合事業も充実しているのも認定率が低い理由である。

委員：病気になる前の対策も必要であろう。医療費の高騰につながる。

委員：竹野地区の地区別の状況はわからないのか。サロンも農繁期には参加者が少なくなる。元気老人が多く、いいことである。

委員：介護予防にみんな頑張っている。都会だと年金だけで生活できるが、田舎は働かないといけない。

委員：働くことに生きがいを感じている人が多く、いいことだと思う。

委員長：仕事での生きがい、サロンの楽しみが大きく影響しているように思う。

委員：それだけの要因ではないのではないか。サロンの活動のおかげで元気になっていると思う。が、都会には民間のコミュニティがあるが、それがいないためサロンに人が集まるのであろう。

委員長：高齢化率が高い、若い人が少ないということは、今後この地域をどうするかになる。

委員：認知症になっても地域で暮らし続けられるようになる、施設入所者が増えると介護費用額が高騰する、介護保険料が高くなるとここに住みたいと考える人が減少していく。そのあたりを町として考え、現実的な見通しを出していただきたい。最近、介護保険は困ったら使っていきましょうということになっている。自分のことは自分でしながら、困ったときはサービスを使いましょうと言うことを皆さんに知っていただきたい。また、京丹波町病院が、国から再編や統合が必要な病院の一つにあげられた。高度医療や先進医療ではないが、日常的な医療をしていただき助かっているの、安心して暮らしていけるの、あの国の報告には腹が立っている。

②第8期介護保険事業計画の策定に係るアンケート調査について

- ・在宅介護実態調査
- ・介護予防・日常生活圏域ニーズ調査

(説明：事務局 資料2-1、2-2説明)

委員：配布数は人口を考慮するのか。

事務局⇒旧町単位の人口比率で配布割合を算出する。

委員：問5 Q2の認知症相談窓口の設問は変えてはいけないのか。相談先を知らない人が多い。

事務局⇒国のモデルの指示で、質問、選択肢は一字一句変えてはいけない。それとは別に、町の独自設問として追加することは可能なので、相談先などについても設問は検討したい。

委員長：どこに相談したらいいかわからない人が多いので、検討してもらいたい。

委員：電話相談でもどこで相談したらいいかわからないという人が多い。

委員：本来は、民生委員に相談するところだが、そこへ相談できない人が多いのか。

委員：認知症を知られたくない人も多い。こういう窓口があることを町としてはPRしていかなければならない。

委員：地域包括支援センターも知らない人が多い。竹野サロンでも世間話の中で介護何でも相談として受けている。

委員長：家族がそういう状況になってやっと調べようという気になる。そうでないと知らない。誰に聞いてもわかる町になるといいのではないか。認知症になるとあまり親しい人には相談しづらい人も多く、電話で相談できるシステムもいいと思う。

委員：せっかくこういうアンケートをするので、聞く側もしっかり考えてしてもらいたい。

委員長：今後効果が出るアンケートにしていただきたい。

(2) 第1回京丹波町地域包括支援センター運営協議会

地域包括支援センターの現況(取組み経過)等について

(説明：事務局 資料3説明)

委員：資料P 3の認知症サポーター養成講座の参加者数 245 人はこの年のみか。延べ人数は何人か。

事務局⇒実施してから10年以上になるため、2,000人弱になる。

委員：子どもたちにも声がけをしてもらっているのか。

事務局⇒校長会を通じて、案内をさせていただいている。

委員：実際に家族が認知症になったとき、孫が緩衝材になることもある。今後もこの事業は続けていてもらいたい。

委員：P 4のアふれあい調理実習会は、和知だけ何故こんなに多いのか。

副委員長：社会福祉協議会の立場で回答させていただく。和知だけは地区単位、その他は小学校区単位で実施しているためである。関わっている人も高齢になり、参加者も少なくなってきたため、今年度からは男性調理実習に事業を変えている。もっとニーズにあわせたものに変えていこうとしている。

委員：男性の調理できる人は必要。もう少し男性も最低限のことができないかと思う。もっといい方法がないか。

副委員長：男性の調理実習は、繰り返し参加される方が多い。本当に必要な人に参加してもらう方法を考えていかなければならない。

委員：男性には調理のベースがないので、基礎から教えてもらいたい。そういう事業を続けてもらいたい。

委員：かけはしのお弁当は社協が実施する毎日型給食のものとは違うのか。

副委員長：ボランティアに作っていただき、配達もボランティアにしてもらっている事業である。ボランティアが高齢化してきて、担い手が少なくなっている。あと3年、5年継続できるのか課題がある。

委員：次の世代の方がいない。仕事が過密で地域に貢献できない。子どもたちをいかにリーダーシップがとれる人に育てるかが課題。

(3) 第1回京丹波町地域密着型サービス運営委員会

地域密着型サービスの現況報告について

(説明：事務局 資料3説明)

委員：デイサービス南天の現在の利用者は何名ぐらいか。

委員：1日6人～7人ぐらい。日によってまちまちであるが。利用されるには認知症の診断が必要であり、ショートステイと併用の場合など、人によっては介護保険の1割負担を超えてしまうこともある。サービスをどういう風にしていくかが難しい、症状が改善されていくことはない。

委員：みわの里は地域密着型サービスに入らないのか。

事務局⇒福知山市の施設になる。地域密着型ではなく広域的なサービスになると思われる。

委員：新規事業者は増えていないということか。事業所の認定は何を基準にしているのか。

事務局⇒法人に開設の意向がある場合は、開設がだめという権限までは町にはない。しかし、むやみに増やすことも検討が必要。

委員：経営者がよくないときは認可しないこともあるのであろう。

事務局⇒新規開設の意向があった場合には、法人格の有無や人材の確保ができるか、運営上の見通しがあるかなど確認したうえで、この場で提案させていただくことになる。

委員長：開設がだめということは難しいが、施設がたくさんできると介護保険料が上がる。

委員：今現在の運営は厳しいのか。

委員：介護報酬が引き下げられ、また、高齢者自体が減少しているので運営は厳しい。そこに新しい事業者ができると、利用者が減ってしまう。京丹波町はそういう施設等を増やす時期ではない。

委員：要介護者が減るとやっていけないのか。

委員：利用者が減るとやっていけない。

委員長：今後は高齢者の実数は減る。施設から言うと厳しい現実がある。その辺のバランスとして、取り合いにならないようにしていかなければならない。高齢化率は若い人が減っていくので上がる。京丹波町は高齢化の先進地である。

委員：介護従事者も待遇が悪いので難しい。そうならば、新しい事業所を認定するのも控えなければと思う。

委員：外出支援の問題であるが、町内で事業者が集まり話し合う場を設けた。福祉有償運送は、自家用運送という白ナンバーでやっている事業で、料金を非常に安く設定しなければならない。タクシーの半分以上の設定となる。最低賃金も上がり、消費税も上がり、ボランティアが減ってしまい、やればやるほど赤字になる。町に話し合っほしいと要望を出している。町でできるだけ不便なく生活できるようにしたいと思っているが、限界になっている。

委員：10年ぐらい前に視察に行ったが、ボランティアでやっていて、いろいろな補償など問題が多い。利用者の運賃を上げることは難しいのか。

委員：京丹波町の利用料金は非常に安い。和知から綾部までで片道で600円が利用者負担。事業所は1,500円ぐらいで、それでは運転手の確保、車の維持ができない状況。町の委託事業であるが、もうできないところまで来ている。

委員：クローバー・サービスでも、同じ事業を行っているが、送迎を担ってくれる人がいない。最低賃金を払うと赤字。限界になっている。車はメンテナンスも必要である。送迎は、病院の送迎だったりすると時間が集中してしまう。町として方策を考えていただかないと難しい。今検討はされているのか。

委員長：結局は最低賃金以下にしないと従事者に払えない。人材はない、公共交通機関の関係で、移送の担当部署が役場で2つあり、その話の整合性がとれていない。十分に役場で考えていただきたい。町が補助金をもらう際に最初の単価を落としすぎている。高齢者の足の確保は、アンケートでも要望が多い。いろいろ考えてもらわなければいけない。

委員：バスの運転手さんは、昼間空いている時間もある。町のバスを使うなどいろいろな方法はある。

委員：公共交通の会議とこの会議、両方に出席している。課題は高齢者の足の確保。町営バスと空白地についての会議では、和知地区の人が誰でも乗れる。担当部署の違いをなくし、町として1つで話し合ってもらいたい。

委員：町は縦割りになっている。連携すれば話はまとまると思う。

委員長：このままでは、この足の確保は今後難しくなる。この意見を町に行くようお願いした

い。同じように運転してもらっていても差ができています。

委員：この場でうちうちに事務局に言っても弱い。町長に要望書を出してはどうか。そのぐらいの気迫がないとダメになってしまう。要望書を出さないと進展しない。

委員長：そのあたりはトップが判断しなければいけない。要望書も1つの手であると思う。また調整してもらいたい。

委員：いろいろな事業を立ち上げてもらっても、移動手段がないことで参加できない人も多い、早急をお願いしたい。

委員長：年度内に方向性を出してもらいたい。

(4) その他

・今後のスケジュール（案）について（事務局 説明）

事務局⇒次回は令和2年の3月下旬ぐらいでお願いしたい。

委員：2月にしてもらいたい。3月は忙しい。

事務局⇒議会もあり、アンケートの発送が1月を予定しているため、集約し概要まで報告するとなるとその時期になる。改めて、連絡させていただきたい。

4. 閉会（副委員長あいさつ）

積極的にご意見をいただき、お礼を申し上げます。アンケートについては、本町は高齢化の先進地であることや、調整済み認定率が他市町村より低いことを踏まえ、今後の取組を進めるためにも、本町独自の質問を行うことも必要と思われる。

移送問題については、縦割りが問題ではないかと感じている。先日、新聞に、舞鶴市の取組として、高齢者だけでなく高校生の移送も含めたモデル事業を行うとの記事が掲載されていた。先ほど、ボランティアの取組は保険がきかないという話が出ていたが、ボランティアにも保険がきくという情報を入手した。まだ1社のみであり、金額が高いようである。全国的に、ボランティアによる送迎が必要であるということが広がれば、保険会社も増えると思う。調べておき、金額等、情報提供できればと思う。この地域では、行政だけの公共交通機関ではなく、交通についてもボランティアの協力が必要になってくるのではないかと。行政にも情報提供していきたい。

本日は中身の濃い良い話が出来た。要望書についても、検討していきたい。本日はありがとうございました。